

技術者からの視点

●第51回●

岩倉米欧使節団

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

慶応から明治への改元は1868年。1871(明治4)年の「廢藩置県」のときには、公家の三条実美太政大臣、岩倉具視右大臣と、薩長土肥の代表である西郷隆盛(薩摩)、木戸孝允(長州)、板垣退助(土佐)、大隈重信(佐賀)の4参議が頂点にいた。

同年、岩倉右大臣を正使(特命全権大使)、木戸参議、大久保利通大藏卿(長官)、伊藤博文工部大輔(次官)。「卿」は空席、山口尚芳外務少輔(次官)を副使とする約50人の「米欧使節団」が、10カ月の予定で横浜港を出発した。同行の留学生を加えれば1000人を超す。一部は途中で帰国したが、正使の岩倉が帰国したのは1年9カ月後である。

維新政府の立役者たちの間に政策上の大きな相違があったなかで、岩倉、木戸、大久保、伊藤という大物が、長期間日本を留守にしたのは驚きである。国内問題よりも、諸外国元首への国書奉呈と、政権を担うべき実力者が先進諸国の実情を親しく知ることが、喫緊の要事であるとの共通認識が、政策抗争の当事者たちにあったにちがいない。

システム工学のすぐれた教科書

この使節団の行動と取得した情報の、公務を除く詳細記録が残されている。

大使随員の久米邦武により『特命全権大使米欧回覧実記』(以下『実記』)が作成され、

1878年に太政官記録掛刊行として、岩倉右大臣の署名付きで公になった。

1977(昭和52)年に岩波文庫に入っているが、漢字・カタカナ書きである。外国の名称は、ドイツが「日耳曼(ゲルマン)」、エジンバラが「壱庁堡」、ナポレオンが「拿破侖」などと書かれているし、現在とは異なる意味で使われている用語があるので読みにくい。2008(平成20)年には、慶應義塾大学出版会から現代語訳が出版されている。

使節団はシステム工学的発想で行動している。使節団の陣容決定から出発までは2カ月ばかりだったのに、彼らは各国の元首、要人に会い、適切な施設を訪問し、訪問先では手厚い接遇を受け、十分な成果を得ている。

短い準備時間でことを行うには、全体システムを見通す危機管理能力が求められる。彼らは、日本駐在の各国大使を帰国させ、事前調整を行わせている。欧米に滞在している邦人を随時呼び出している。最初の接見や面会の場で、訪問目的を相手に理解させ、その後手厚い対応を引き出させている。

これらを詳しく記した『実記』は、システム工学のすぐれた教科書になっている。

感性・好奇心・システム思考

『実記』には、技術に関する具体的な記述が多い。外国からのお雇い技術者に頼って

た時代であり、使節団の随員には技術の専門家はいない。

しかしながら、紡績、製鋼、造船、交通、電信、兵器、医療などについての詳細な記述がある。五感を働かせて問題点を感じとろうとする情熱が、先端技術についての豊富な内容を持つ『実記』の作成につながった。

彼らのすぐれた感性と好奇心は、まさにシステム技術者の要件である。また使節団は、新しいインフラストラクチャーである交通、電信を巧みに利用している。

使節団がワシントンに向き米政府と交渉にあたった際に、委任状の不備を指摘されたことがあった。このとき、ためらうことなく大久保、伊藤の両副使は、日本との間を往復して、新しい委任状を持参した。

この臨機応変の処置には、使節団の先進技術への理解を感じる。ジブラルタル、マルタ、アデンなどの海上交通の要所、灯台、運河、隧道、橋梁、医療システム、万国博覧会などのインフラストラクチャーについての記述が多いのは、彼らにシステム思考という触手があったからであろう。

外国を知り、自国を分析する

『実記』には、外交の基本、あるいは心構えについての記述も多い。小国をヨーロッパ一の強国に押し上げたプロイセンの鉄血宰相

相ビスマルクの「国際公法は表向きであり、実際は弱肉強食である」という発言がくり返し引用されている。

さらに、ヨーロッパ諸国の外交には、必ず裏と表がある。アメリカ人は、初対面から旧知のように接してくれるが、イギリス人はなかなか胸襟を開いてくれない。海運国のイギリスは、船舶の出入りが一日滞ると、飢餓状態になるという弱点がある。オスマン・トルコとペルシャは同じ宗教であるが、宗派が異なるので融和は難しく、ロシアは両者の隙を狙っている。ヨーロッパ内で接するヨーロッパ人は紳士だが、海外では粗暴である、などなど。明治の官僚はそうしたことに気がついていたのである。

また、「日本には、昔から発明が少ないが、外国から得た知識をよりすぐれたものとしている」という、技術者の耳に痛い記述もある。先進国のすぐれた技術といえども、わずかに50年の差に過ぎないと自らを励まし、一方では、慢心すると新興国に抜き去られるとの自戒もある。

物見遊山よりも情熱と成果を

技術者の世界では「同じ誤りをくり返してはならない」、「失敗は肥やしである」という鉄則がある。それゆえ、先人が残してくれた記録は貴重であり、『実記』は、技術者にと

って宝の山である。まして『実記』の要点は、岩倉、木戸、大久保、伊藤といった国政の大先輩がたどった道の記録にあるのだから、国政に携わる人は、技術者が感じるよりも、はるかに多くの宝物を掘り起こせるだろう。

ところで、日本からの調査団に対する、受入れ先での評判が近年、芳しくない。公知のことから尋ねたり、前の調査団と同じ質問をくり返すことがあるとの苦情を聞く。

調査の目的が判然とせず、物見遊山に興味があるのなら、受入れ側もそれなりの対応で済ませたいのである。

調査団は相手側の反応など気にせず、『実記』に負けないような報告書を作成して、その成果を誇示してほしい。

